

モザイク通信

No.122

October 2021

発行：モザイク会議 議長 森敏美

モザイク会議事務局：〒185-0012 東京都国分寺市本町 4-12-4 司アートシティ 104

モザイク会議ホームページ：<https://maa-jp.com/> Email: maaj@maa-jp.com

編集／作成：モザイク会議運営委員会

2022年のテーマ展会場が決まりました！

例年、あざみ野の展覧会の翌年に会員有志によるテーマ展を開いています。

今迄は北青山のオリエアートギャラリーで展示してきましたが、来年は気分を新たに京橋に場所を移して開催する事にしました。多くの方のご参加をお待ちしております。

詳細は次号でお伝えする予定です。

2022年11月21日(月)～26日(土) <6日間>

ギャラリー檜e・F

〒104-0031東京都中央区京橋3-9-2宝国ビル4F 電話 03-6228-6558

モザイク展 2021

横浜市民ギャラリーあざみ野で9月8日～20日迄、開催されました。

受賞者は以下のように決まりました。

大賞

杉山高行「風が奏でる」

2席

立花基美子「異世界」

3席

櫻井真智子「欲張り」

名古屋モザイク賞

喜井豊治「名前のない花」

モザイクタイルミュージアム賞

今野栄子「コウモリラン」

佳作

岩田英雅「ファラオの野望」

佳作

若月弓枝「Growth」

講評 藤原えりみ

美術ジャーナリスト

東京藝術大学大学院美術研究科修士課程修了(美学専攻)。

女子美術大学・東京藝術大学・國學院大学 非常勤講師。著書多数。

2年前に村田真さんからお声がけいただいて参加した講評会では、モザイクというメディアの物質的特性に注目して審査させていただきました。絵画的イメージをテッセラで再現するのではなく、石やガラスの特性を活かした造形表現の可能性に関心を抱いたからです。



大賞 杉山高行「風が奏でる」

そして2年後、今回は出品作品のいずれもが私の関心にビシバシと響くものが多く、どれを受賞作品として選ぶべきかとても難しい審査状態となりました。いずれの作品も、モザイクというメディアをいかに解釈し、作者の思い描くヴィジョンに素材と形態をどのように適合させるのか、熟慮の上で制作された作品だったからです。

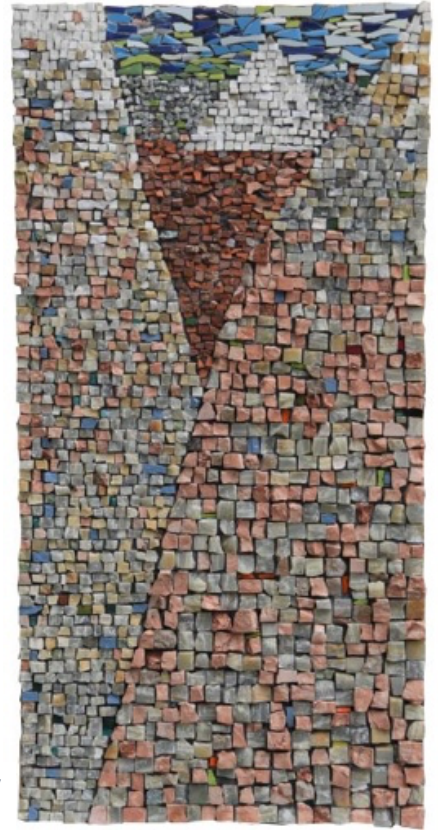
前回では喜井豊治さんと杉山高行さんは作家として別格だと思いましたので受賞対象から外しておりましたが、杉山さんの半立体的な造形要素と前回作品にも現れていた女性像のデリケートな組み合わせにはっとさせ、大賞に選ばせていただきました。小さなテッセラの一つ一つに注ぐこよなき愛情がフツフツと伝わってくる優しい手際にも惹かれます。この半立体的造形から今後はどのような作品展開をしていくのかもとても楽しみです。

二席の立花基美子さんのいずことも知れない南国風の風景「異界」は、具象的なイメージを保持しつつ手前から奥の砂漠の風景まで、絶妙な色彩バランスとテッセラの形の多様性に目を惹かれました。具象的なイメージを保持しつつも、モザイクというメディアの特性を活かす試みだと思います。

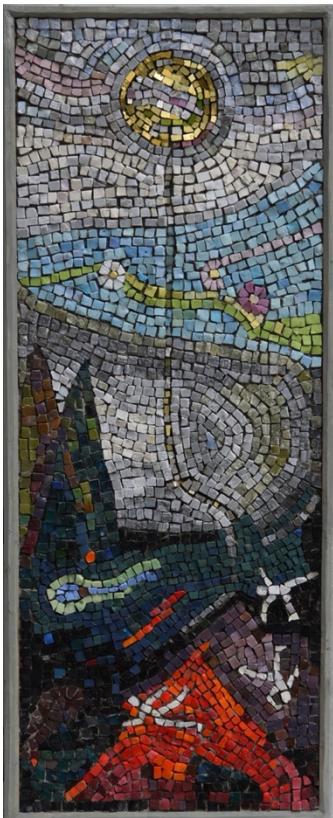
三席の櫻井真智子さんの「欲張り」ですが、前回も動物の表情や仕草が面白いなあと感じておりました。今回は実際の木の実と立体モザイク像の組み合わせが「もの」としての存在感を強く訴える効果を発揮していると思います。動物ネタは癒しのルーツですが、さてここからどのような作品が生まれてくるのでしょうか。「可愛い」だけではない動物の実相にも迫って欲しいなあなどと、余計なお節介かもしれませぬが.....。

佳作賞に選ばせていただいた岩田英雅さんの「ファラオの野望」は、縦長の画面の左右をピラミッドの一部で構成し、二つのピラミッドの間から遠方のピラミッドと空が見える構図に惹かれました。また手前のピラミッドは下部のテッセラが大きく、上に従って小さくなる工夫によってピラミッドの高さまで表現できていると思います。具象的な形態を残しつつ、モザイクならではの特性が活かされている点を評価いたしました。

他にも宮内冷子さんの「蜘蛛の糸」や戸祭玲子さんの「穏やかな日常」、土屋忠宣さんのユーモラスな「ターコイス」などなど、今回は本当にひとつひとつの作品の魅力が際立っていたと思います。とても楽しく拝見させていただきました。



佳作 岩田英雅「ファラオの野望」



宮内冷子「蜘蛛の糸」



戸祭玲子「穏やかな日常」



土屋忠宣「ターコイス」

講評「モザイク芸術 欲動の小さなかけらが繁茂し開く異界」

藤井雅実 芸術哲学研究

1980年代前半、東京で哲学者デリダの論文名を冠した「画廊パレロゴン」を主宰。芸術～文化論の執筆・翻訳、講師などで活動。著書多数。

モザイク芸術は世界各地で太古から様々に行われていましたが、近代の芸術ジャンル分類ではあまり表立っていませんでした。今回、新しいモザイク芸術をまとめて拝見させていただきましたが、とても興味深いもので、まず、今回のモザイク展 2021 の審査員というタイヘンな役でお呼び下さったモザイク会議の方々、素敵な作品を見せてくださった出品者の方々に深く感謝いたします。



2席 立花基美子「異世界」

モザイク芸術は、様々な素材の「小さなかけら＝テッセラ」を組み合わせ、形作られる芸術。様々な鉱物や石だけでなく陶磁やガラスやプラスチックなど人工素材木から木や布や紙や木の実など、何であれ大小の板や粒という物質の細片が、様々に織りなされ、像や空間を紡ぐ。

モザイク芸術に限らず造形芸術は、絵画でも彫刻でも、（1）形やイメージと空間の構成で成り立ち、（2）その形や構成が様々な意味や物語や理念など象徴的效果も担い、さらに（3）絵具や石や金属などその素材の感触が（1）と（2）に強く関わって、その全体で美的～芸術的対象として現われます。

そしてモザイク芸術は、何よりテッセラの素材の特性で、絵具や描線で描かれた絵画や彫塑や彫刻と異なった一つの美術のジャンルとなる。作る者にも観る者にも、このテッセラ＝小さなかけらが、その欲望を導く対象かつ原因として働いてこそモザイク芸術は出現し、テッセラとそれが織り成すテクスチュアが、モザイク芸術の美的～芸術的な効果の魅力の源泉をなしています。素材が茂って人を駆り立てる「茂材駆」、あるいは材料を工夫し祭る「茂祭工」と漢字表記できそうなモザイク。

大賞の杉山高行さんの「風が奏でる」は、微細なテッセラのテクスチュアが覆う様々な形のピザのような板が重なる。その、板状の重なりが織りなすテクスチュアと、そこに広がる小片のテクスチュア、その二重のテクスチュアの戯れがあり、その中に、人の顔や木の葉のようなシルエットが、“風が

奏でる”ように漂う。異質なテッセラの層が重層しながら、視覚的な風をそよいで奏でる構成のバランスが際立っていました。

第2席の**立花基美子**さんの「異世界」は、しっかりとしたブロック状のテッセラが、セザンヌやゴッホの筆触とも通じる動的な連鎖をなして、南国の、砂丘のようでもあり波打つ海原のようでもある躍動的な“異世界”空間を生成していく。

ここでもしかし、絵具の筆触とは異なるテッセラの群れが、物質的な抵抗感を持ちつつ、非物質的な空気と光の動感と響き合っていました。

第3席の**櫻井真智子**さんの「欲張り」は、硬いテッセラの集まりなのに柔らかい「もふもふ感」で見つめるリスちゃん。動物の柔らかな肌理が、テッセラの硬い肌理の連なりから生み出され、さらに、足元に自然の肌理の木の実もテッセラとして加わっている。異質なテッセラの群れなす“肌理の欲張り”ですね。



3席 櫻井真智子「欲張り」



佳作 岩月弓枝「Growth」

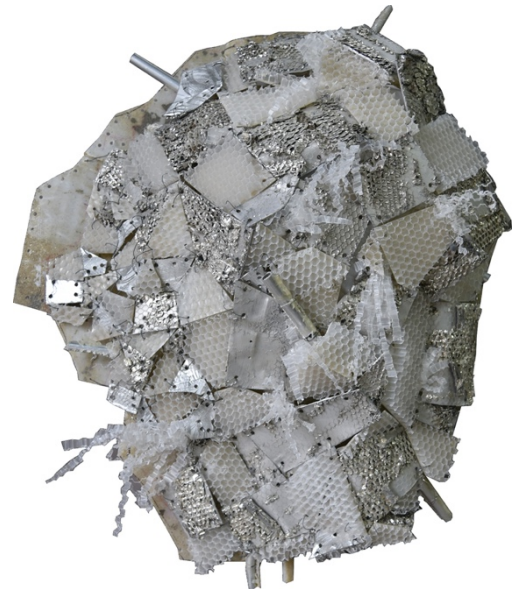
佳作その他の中では、**若月弓枝**さんの「Growth」は、植物たちの化石を含む細かな岩石の積層の中、化石の植物が化石になっ
てなお、化石のままに成長 (growth)しゆくような生命感を感じさせる立体絵画。素材であるテッセラという物が、その非有機物の特性を強く持ったまま有機的に増殖する、モザイクの特性を自ら物語る遺跡のようです。

今野栄子さんの「コウモリラン」も、テッセラの小さなかけらが細胞のように有機的なつながりで、櫻井さんのリスの、イメージの愛らしさとは異質の、植物という以上に動物的な生命感を発散させていた。

同じように植物系のテーマを持ちつつも、**喜井豊治**さんの「名前のない花」は、そのテッセラの小片の緻密な構成と、そこに浮かぶ柔軟なイメージとが繊細な美的調和を見せ、他方、企画展側で展示されていた「Super Hybrid Honeycomb」は、ある意味それ

と逆に、多様なジャンク風素材が蜂の巣状に混交し、モザイクか否かの境界域を示唆することで、ジャンク・アートからポストモダンのハイブリッドなアート・シーンと響き合う。

岩田英雅さんの「ファラオの野望」は、一見幾何学的な抽象絵画のような構成の中、ある意味、幾何学的抽象造形の最古の大遺産でもあるピラミッドのイメージが重なり合う半具象的で象徴的なもの。テッセラの大小が、遠近の質感も出ず。



喜井豊治 『Super Hybrid Honeycomb』

受賞作以外でも、福澤裕子さんの「解ける」はその題が言うように、硬い素材が“解け”、美しい流れをなす三幅対。小田いくこさんの「a frame」は、作品を外から分けるフレーム（額や縁取り）自体を主題化し、四角い画面と茶色のフレーム状が呼びかけ合う「モザイク芸術の自己反照（self reflection）」でもあった。



福澤裕子「解ける」

芸術の自己反照？ この問題は、モダンからポストモダンを経て今日に至る、芸術に限らず文化全体に通底する重要な問題です。

モザイク展 2019 の記事で審査員の村田真さんが、モザイク芸術がより広い現代アートシーンに踏み込むには、美術史の文脈との関わりをよりしっかり持たせるよう提案していました。それは、上記の芸術の構成要因（2）に関わる問題。

近代芸術だけでなく、古今東西、どのような芸術表現も、工芸や建築、造園その他の実用芸術や宗教芸術であっても、それが生み出され経験されるその社会・文化の在り方と、様々な関係を結んでいます。近世以降の西洋文明以外の多くの文明では、「芸術」という分野は、宗教や建築や家具その他のモノゴトに偶像や装飾として絡み合っていました。ルネサンス以降の西洋文明で、他の分野から自立した一つのジャンルとなりました。

そして、ロマン主義を経て印象主義へ展開するあたりから強まったモダンアートは、単に美的な対象を作り鑑賞するという以上に、「自らの分野の本質や根拠を自ら問い返す」という理念が強まります。その脈絡で一方は、抽象美術や十二音音楽など各分野の特性を純化する方向（内への徹底）、他

方、ダダやシュルレアリスム、ポップアートや概念芸術など、その限界を突き詰め、新たな場を切り開くという方向（外への超脱）、この内と外への自己反照（self reflection）の探求と挑戦が、実用芸術と異なるファインアートに不可欠な課題となっていました。そしてまた、数学や哲学その他の学でも、自らが成り立つ基盤自体を自ら探求することは、先端文化の様々な分野での中心的課題ともなっていました。

そしてこの近代の自己反照の展開は、その挑戦の果てに、二十世紀後半、近代の芸術や文化が成り立つ基盤自体が、西洋近代という特殊な文明に基づいた特殊なものであることを、自己反照の極限で様々に露呈した。それが、70～80年代、欧米日の先端文化シーンを覆った広義のポストモダンと呼ばれる文化状況でした。

それは一方で、近代的理念に囚われない可能性へ開く開放の報せでしたが、しかし同時に、先端アートもアジア諸国その他、グローバルに広がると共に、「何でもあり」の無限定なシーンという新たな難題をもたらすことともなった。

アートがそうした新たな難関にある今日、ファインアート界には新参者でもあるモザイク芸術は、テッセラという物質的な限定ゆえ、慣習的な意味の世界に回収しきれないこの〈物の小さなかけら〉を欠かしえないからこそ、他の絵画や彫刻とは異なる未開拓の潜勢力で、未知の異界を開く可能性が夢見られるでしょう。



小田いくこ 「a frame」

註：後半で言及した近代以降の芸術と文化の基盤の問題は、芸術と哲学を主題化した

「〈外〉への共振－哲学と芸術の限界とその〈外〉」（電子ブック『Search&Destroy』第1号東京造形大学大学院）などご参照ください。以下から無料でダウンロードできます。

<http://cs-lab.zokei.ac.jp/labtu/%E9%9B%BB%E5%AD%90%E6%9B%B8%E7%B1%8Dsearch-destroy/>

また、前半の芸術の仕組みの話題に関連したテキストとして、

「特異像（シンギュラル・イメージ）としての絵画――〈外〉の／への私的言語の享楽」 『21世紀の画家、遺言の初期衝動 絵画検討会 2018』高田マル・編

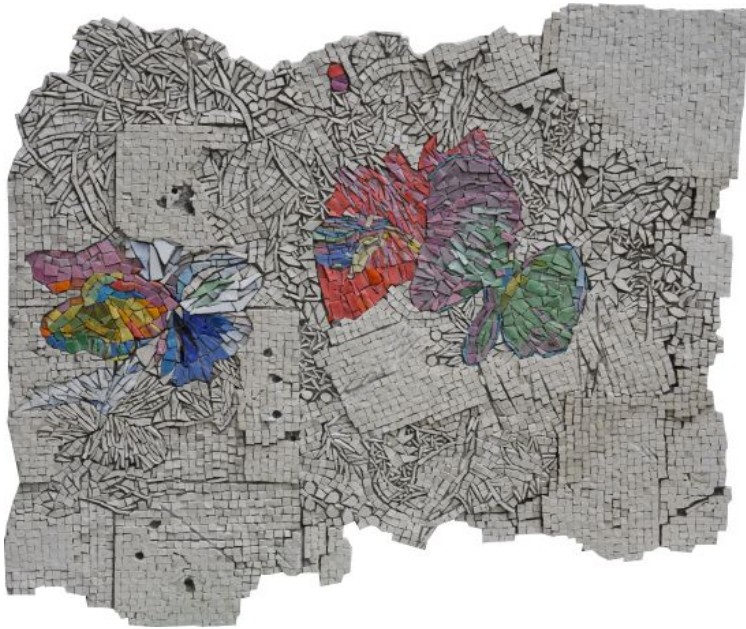
<https://kaiga.myportfolio.com/1>

その背景にある芸術への挑戦など人間特有の高度な（動物から見れば変態的な）欲望から、人工知能の欲望実装の問題を論じた「AIは死の欲動を実装できるか？」『人工知能美学芸術展 記録集』人工知能美学芸術研究会（AI美芸研）編

https://www.aibigeiken.com/store/aiaae_ac.html

名古屋モザイク賞：喜井豊治「名前のない花」

相澤 昭郎 名古屋モザイク工業 (株)



名古屋モザイク賞 喜井豊治「名前のない花」

モザイク作家として大家の作品なので、コメントが書けないのがわかりながら、選ばせて頂いた。アートには、吃驚するもの、緊張するもの、心穏やかになるもの、興奮するものと様々あると思うが、作者の作品からは、いつも静謐で穏やかな雰囲気を感じられる。今回は、その静謐な作品の中に花が咲いた。それから、わざと穴を穿いたり、切り込んだような跡も見られる。ドリルやグラインダーであとから破壊したそうだ。作者の説明によると「人間がいなくなった廃墟に自然が復活して、花が開いた情景」を表現している。

「技術的なことと作品の芸術性は、あまり関係無い。」と主張される作者であるが、やはり個々のカットされた大理石ピースが群を抜いて美しい。ひとつひとつが荒くても全体として完成された作品になりうるし、反対に細かさを追求しても、それはそれですごいものであるが、この作品には、モザイクピースの繊細な美しさと様々な形に丁寧にカットされた配列には独特で不規則なリズムがある。タイルだと均一があたりまえで、規格化されているので、偶然に出来た面白さのようなものを表現するには物足りない。それがアートとマテリアル（建築材料）との決定的な違いである。



そして未完性で細胞が増殖していくような全体像がある。フレームで区切られた作品とは別の感覚で、広がりを感じさせる。人間が居なくなった大地には、次にどんな動植物が繁栄するのだろうか。

モザイクタイルミュージアム賞：今野栄子「コウモリラン」

村山 閑 モザイクタイルミュージアム



モザイクタイルミュージアム賞 今野栄子「コウモリラン」

「モザイクタイルミュージアム賞」は、タイルを魅力的に用いている作品に差し上げる賞として、前回から当館で選ばせていただいています。今回の審査については、個々の作品の特徴が際立って見えて、ずいぶん迷いました。土屋忠宣さんの〈ターコイス〉は、三分五厘や丸タイルを複雑な立体に沿わせた表現が巧みでしたし、宮崎岑子さんの〈Cheer Up!〉は、躍動する人体を生き生きと描いて楽しくなりました。破損してしまいましたが、森敏美さんのパッチワークのような輸入タイルの使い方も魅力的でした。

その中で今野さんの作品は、繊細な制作の様子が伝わり、とても好ましく感じられました。大きく広がるコウモリランの葉の輪郭を象り、表面は平面状に作っておいて、色彩で立体

感を表そうとされています。全体に石のタイルが多く、最初はもう少しはっきりした色遣いの部分がほしいように思いましたが、根本付近に使われたモザイクタイルの光沢が、植物の宿す水分を感じさせ、ハッとしました。捉えどころのないような色合いのコウモリランから、自身の目に映る色を丁寧に拾い出していることが感じられましたので、選ばせていただきました。



宮崎岑子「Cheer Up!」



森敏美「AMBIVALENCE2108」

新入会員

土屋忠宣さん

今回のあざみ野展で「ターコイス」を制作された方です。自己紹介は次号になりますが、お楽しみに。

会費についてのお知らせ

2020年度、2021年度の2年で12000円の会費を未納の方は振り込みをお願いします。

振り込み先 ゆうちょ銀行口座記号：10000 番号：97185511
他の銀行からの振込の場合は以下のようになります。
ゆうちょ銀行店名：008（ゼロゼロハチ） 店番：008
普通預金口座：97185511 名義：モザイクカイギ

ミニモザイク交換会進行中！

フィラデルフィア・モザイク協会（MSoP）との交換会にモザイク会議から16名の参加者が集まり、その数に合わせてMSoP側でも参加者が登録され、ランダムにペアを組みました。MSoPにはさらに9名がウェイティング・リストにいますので、今からでも12/1までに小さいモザイク（10cm四方程度、サイズも形も自由です）を作ってアメリカに発送できそうであれば参加できますので、メールしてください。詳細をメールいたします。ayakichi0331@gmail.com 木下綾
MSoPのミニモザイク例：<http://www.mosaicsocietyofphiladelphia.org/artist-trading-card>

展覧会情報

「壮観！ナゴヤ・モザイク壁画時代」

2021年11月6日（土）～2022年3月22日（火）

水曜日休館（祝日の場合は開館）

INAX ライブミュージアム「土・どろんこ館」企画展示室

〒479-8586 愛知県常滑市奥栄町 1-130 TEL:0569-34-8282

入場料：一般:700円、高・大学生:500円、小・中学生:250円



名古屋、高度経済成長期、やきもの産地、矢橋大理石商店などをキーワードに、1950-70年代のナゴヤのモザイク壁画黄金期を実物パネル、復元移転作品、写真などで紹介。トークや冊子もあり。

<https://livingculture.lixil.com/topics/ilm/clayworks/exhibition/nagoyamosaic/>